広島第二県女二年西組

関千枝子

原爆で死んだ級友たち

島第二県女二年西組

原爆で死んだ級友たち

関千枝子

筑摩書房

著者略歴

1932年大阪に生まれる．女学校二年のとき広島で被爆．早稲田大学文学部露文科卒業．毎日新聞記者を経て，現在，全国婦人新聞記者．

広島第二県女二年西組
原爆で死んだ級友たち

©関千枝子 一九八五

一九八五年二月二十八日　第一刷発行
一九八五年六月　十　日　第六刷発行

著者　関千枝子

発行者　布川角左衛門

印刷　多田印刷
製本　積信堂

発行所　筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京六―四一二三
電話東京二九四―七二一（営業）
二九四―七二一（編集）

Printed in Japan　0021-85259-4604

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

もくじ

序　章　八時十五分——広島市雑魚場町　5
第一章　炎の中で　12
坂本節子と北小路満知子　12
宇品にて　16
学校（第二県女・女専）で　20
日赤・波多ヤエ子の死　25
酒井登美枝　28
第二章　学校に帰った級友たち　31
火浦ルリ子　31
三浦美枝子　34
吉村恭子の家で——恭子の死　37
若い先生、高橋律子　43
六日夜〃大河にて〃　45
一年生と二年東組　47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

救護所となった学校 49
為数美智子 51
転校生の日々 56
本地文枝 62
田中マサ子 71
「物理室」の人びと 75
上野美智恵 80
飯田智美 84
浅尾亘子 92

第三章 〃南へ〃——業火に追われて 97
石原良子 98
鷺谷清子 99
森沢妙子 105
新藤アツコ 113

二井璋子 115
国広邦子 119
亀沢恵尼 121
石橋宏子 130
中村綾子 131
前川美紗子 133
海保菊子 134
猫島寿子 137
沖本桂子 139

第四章　島へ 140
玖村佳代子 141
工藤よし子 144
東藤瑞恵 145
大西逸子 147

佐古田昌恵 148
担任、波多ヤエ子 152
古城栄子 153
植松京子 158
品川惇子 165
増本悦子 169
山田玲子 170
林良子 173
岡峯白百合 174

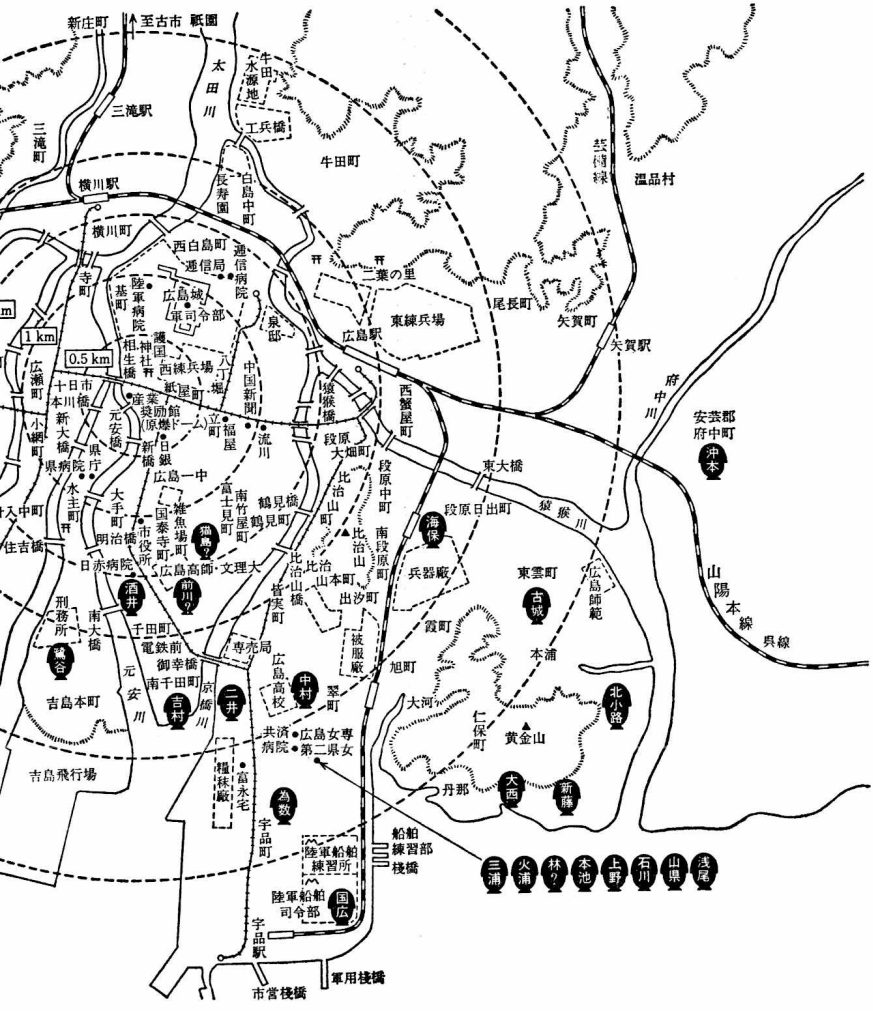
終章 八月十五日 178
神話の崩れた日 178
山県幸子 181
石川清子 185
石原良子、古城栄子、海保菊子の死 188

木下敏之教頭 189
病欠、生き残りの人びと 191
章外の章（その一） 耐えて生きる 194
章外の章（その二） 原爆と靖国 202
最年少の英霊 202
侵略の神 210
（多少長めの） あとがき 215

装幀　菊地信義

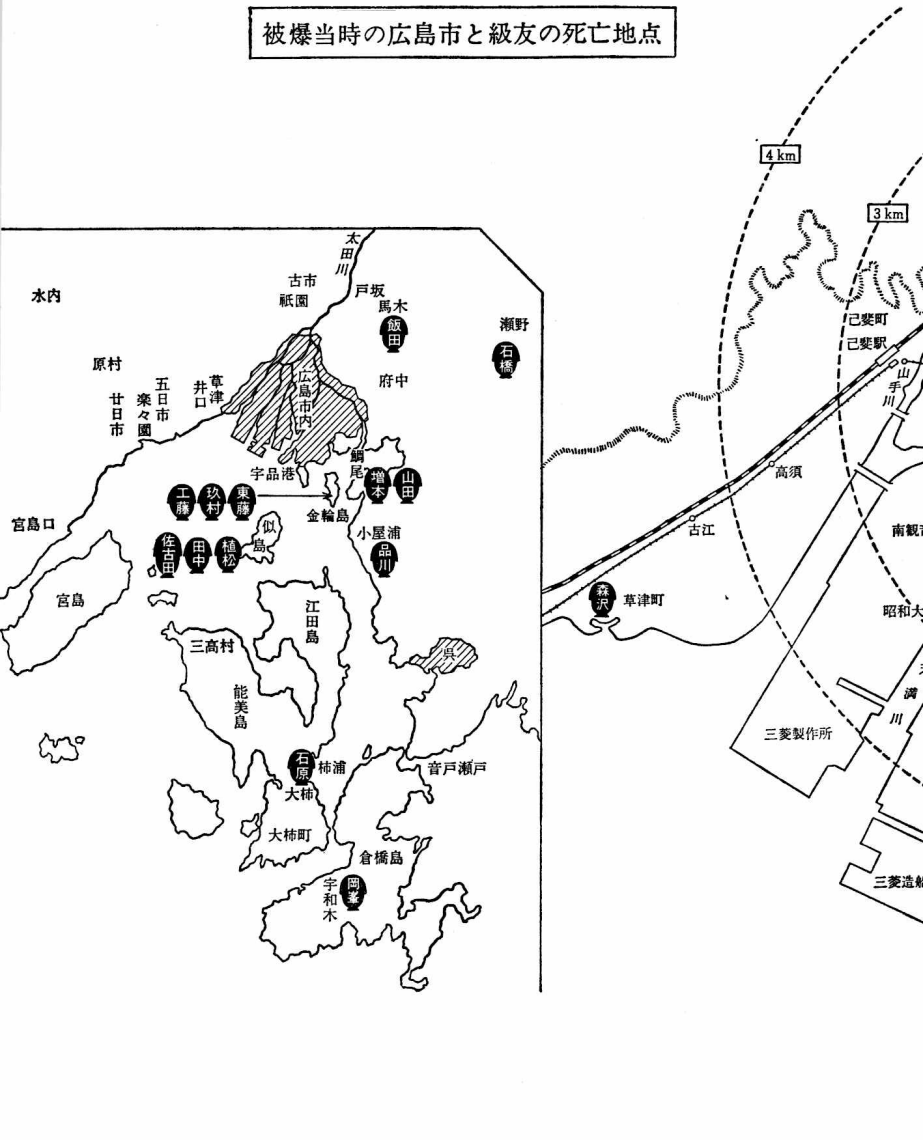
広島第二県女二年西組

原爆で死んだ級友たち



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

被爆当時の広島市と級友の死亡地点



序章　八時十五分——広島市雑魚場町

一九四五年（昭和二十年）八月六日早朝、テニアン基地を発進した先発のアメリカ軍気象観測機一機は高度一万メートルで広島市に接近し、後続の原爆搭載機B29エノラ・ゲイ号にむけ、晴天で攻撃可能の旨を打電した。広島の中国軍管区司令部は、この観測機の侵入に対し、午前七時九分に警戒警報を発令したが、爆撃はなく、まもなく退去したので、午前七時三十一分警報を解除した。そのころ市内では、通勤者の群れが各自の職場へ急いでおり、また都市防衛対策としておこなわれていた建物強制取り壊し作業が午前七時にはじめられ、多数の義勇隊や動員学徒たちが市の内外から作業現場に集合していた。警戒警報が解除されて安堵していたそのとき、午前八時十五分、一瞬の閃光が全市をおおった。（『広島・長崎の原爆災害』）

八時すぎというのに太陽は暑かった。一軒のひき倒された家の屋根の上から道のはじに向かっ

て、広島第二県女（広島県立広島第二高等女学校）二年西組の生徒たちが一列に並んでいた。引率教師の波多ヤエ子、高橋律子がひきはがした瓦を生徒に渡す。生徒たちはそれをリレー式に手渡し、最後の一人は、道端にきれいに積み上げる。「ハイ」「ハイ」かけ声をかけながら瓦はみる間に積み上げられて行った。昭和二十年八月六日、広島市雑魚場町（現・国泰寺町）。市役所裏――とよばれるこの一帯で、あちらでもこちらでもこうした瓦運びをしている集団があった。

〝建物疎開作業〟はいつも瓦運びから始まった。瓦や古材木や、もう一度使えそうなものを選り分け、どうしようもない廃品だけは捨て、そのあとをならしてきれいな道にする。そんな重労働の主力が、まだ工場に学徒動員されていない、中学校、女学校の一、二年生（現在の中学一、二年）、十二歳から十四歳の〝子どもたち〟だった。道具すらなく、クワやシャベルを自宅から持参して……。だが、生徒たちはもうこんな作業になれきっていた。すばらしいスピードで、瓦ははぎとられて行った。かすかにB29の爆音がした。

「あっBが……」

波多が空を見た。何人かの生徒も見上げた。パラシュートをはっきり見たものもいた。

このとき警戒警報が解除になっていたのを、被害をふやしたもと、と非難する人もいる。だが、当時の常識として、一機や二機の飛行機は空襲を意味しなかった。迷い機か偵察機か――。ましてパラシュートに爆弾がついているなど……。落下傘は人がおりてくるものだ。何人かの少女は笑いさざめいて、ゆらゆらと落ちてくる落下傘を指さした。

八時十五分。閃光と轟音。広島は死の街となった。

広島市雑魚場町。市役所裏。爆心から南へ一・一キロメートル。この地点に広島第二県女からは二年西組一組だけが動員されていた。現場にいたのは、

〈教師〉　波多ヤエ子（二十九歳）、高橋律子（二十歳）。ほかに教頭木下敏之（三十七歳）が、自宅から現場に向かう途中で被爆している。全員死亡。

〈生徒〉　浅尾亘子、飯田智美、石川清子、石原良子、石橋宏子、植松京子、上野美智恵、沖本桂子、大西逸子、岡峯白百合、海保菊子、北小路満知子、国広邦子、工藤よし子、玖村佳代子、古城栄子、酒井登美枝、坂本節子、鷺谷清子、佐古田昌恵、品川惇子、新藤アツコ、為数美智子、田中マサ子、東藤瑞恵、中村綾子、二井璋子、猫島寿子、林良子、火浦ルリ子、本地文枝、増本悦子、前川美紗子、三浦美枝子、森沢妙子、山田玲子、山県幸子、吉村恭子、亀沢恵尼。以上三十九人。平均年齢十四歳。最年長古城栄子十五歳六か月。最年少酒井登美枝十三歳四か月。うち坂本節子を除く三十八人が、八月六日から二十日までの間に死亡。一人、生き残った坂本節子（結婚後、平田姓）は昭和四十四年一月、胃ガンのため死亡。三十八歳。

なお、この日欠席して生き残った生徒は六人である。加藤麗子（現姓・幸田）、中川節子、橋本ミサコ（現姓・網村）、山崎容子、藤井秀子（終戦後まもなく転校、消息・生死不明）、そして筆者、富永千枝子（現姓・関）。

一筋の閃光とともに少女たちの目はくらみ何もわからなくなった。生存した坂本節子の記憶にも、〝音〟はない。吹きあげられ爆風に飛ばされ、一瞬の失神ののち、気がついたときはあたりは真暗だった。手さぐりであたりを捜しても、さっきまでいっしょにいた級友がどこにいるかさ

えわからない。〝太陽がなくなった〟坂本節子は一瞬、そう思ったという。あたりから「波多センセーイ」と担任の波多をよぶ生徒たちの悲鳴のみが聞こえた。

『気がついてみると、これはどうしたことでしょう。辺りは真暗闇。その中から真っ赤な焰がめらめらと燃え上り、刻一刻と拡がって行きます……』(唯一人の生存者、坂本節子の文章から。『原爆の子』所収)。一瞬にして、あたりの地形までかわってしまったような気がした。真赤な炎が燃え上り、その炎の明るさであたりを見た坂本節子は仰天した。

『――お友達の顔は焼けただれ、服はぼろぼろに破れ、がたがた慄えながら右往左往する有様は、何にたとえられましょうか。先生は雛鳥をいたわる母鳥のように両脇に教え子を抱かれ、生徒は恐れわななく雛鳥のように先生の脇下に頭を突込んでいます。先生の頭はいつの間にか白髪に変り、何時もの先生よりずっと大きく見えました。私は唯やたらに「先生、私は坂本ですよ」と繰返しますと、三回目にやっと頷いて下さいました……』(坂本節子『原爆の子』より)。

私の記憶にある波多は、年配の大ベテラン教師であった。戦争末期の専門学校を二年でくり上げ卒業させられた若手教師(この現場にいっしょにいたもう一人の教師、高橋律子はまだ二十歳だった)の中にあっては、波多はたしかに〝ベテラン〟ではあったのだが、年齢は、まだ二十九歳だったのだ。現場の最高責任者として責任感と驚愕と恐怖と――。二十九歳のうら若い女性の髪を、一瞬にして白髪に変えるほどの思い――。

坂本節子は、波多が両腕に二人の生徒を抱きかかえて「解散――」と叫んだのを覚えている。その二人が誰だったか――これはさだかではない。

(この時、波多が『解散』といったことを、若い方などは不審に思うかもしれない。戦時中、特に勤労奉仕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com